『誰でもできるタグラグビー　トライセットキャンペーン』
実施レポート

学校名	西伊豆町立仁科小学校	実施日	5月22日
担当教員名	鶴田　太郎	実施学年・人数	6年 34人

学校・学級紹介	仁科小学校は全校児童173名、全て単学級という小さな学校である。そのため、どの学年も小さいときから同じメンバーで生活してきており、誰とも話ができ仲のよい集団が多い。 その反面、勉強でも運動でも得意なのは誰か、という順位づけのようなものが子どもたちの中にあり、これまでとは違う自分を求めていこう挑戦することが少ない気がする。6年生は一番人数の多いクラスであり、運動が得意な集団である。サッカーなどのレベルは高いと感じるが、女子や一部の男子などは上手にその中に入っていけない様子も見られる。
実施内容	○タグラグビーのオリエンテーション ○ラグビーボールを使ったドッヂボール ○タグとりおにごっこ（縦20m、横15mのコート）
指導のポイント	初めてタグラグビーに触れる子がほとんどだったので、ボールやタグを取ることに慣れることをねらいに行った。 タグ取りおにごっこでは、チーム戦や個人戦など得点を競う形（タグを取ったら1点、相手に手渡しでタグを返したら1点）で何回か行い、その都度タグを取ったら「タグ！」と大きな声でコールすること、タグは手渡しで返さなくてはいけないこと、2本のタグがついた状態でないとプレーできないこと、タグを取りきた手を払ったり体を押さえたりしてはいけないこと、自分のタグを押さえてはいけないことなどを確認して試合での基本ルールに近づくように修正していった。
感想・印象 今後の展望	タグ取りおにごっこはタグラグビーの基本ルールを教えるためのの手立てとして有効だと感じた。「タグをとれてうれしかった。」と感想に記入する子どもが多く、特に女の子が楽しそうに活動しているのが印象的だった。全員が同じスタートラインに立った状態からスタートできるタグラグビーだからこそ、誰でも積極的に取り組めたのではないかと感じた。また、「タグ！」と大きな声を出すことは、自己表現にもつながるように感じたため、しっかりと声を出させていきたいと思った。

『誰でもできるタグラグビー　トライセットキャンペーン』
実施レポート

学校名	西伊豆町立仁科小学校	実施日	6月5日
担当教員名	鶴田　太郎	実施学年・人数	6年 34人

学校・学級紹介	仁科小学校は全校児童173名、全て単学級という小さな学校である。そのため、どの学年も小さいときから同じメンバーで生活してきており、誰とも話ができ仲のよい集団が多い。 その反面、勉強でも運動でも得意なのは誰か、という順位づけのようなものが子どもたちの中にあり、これまでとは違う自分を求めていこう挑戦することが少ない気がする。6年生は一番人数の多いクラスであり、運動が得意な集団である。サッカーなどのレベルは高いと感じるが、女子や一部の男子などは上手にその中に入っていけない様子も見られる。 タグラグビーの授業を行っていくうちに、体育がタグラグビーだと喜んだり、休み時間にチームで集まって作戦会議をしたりと、こどもたちがタグラグビーを好きになっていく様子が伝わってきた。
実施内容	○チームごとの作戦会議・準備体操・準備運動 ○試合（縦20m、横15mのコート2つ） 3チームで1つのコートを使い、試合を行わないチームが審判を行うようにして子どもたちだけで試合を進められるようにした。
指導のポイント	子どもたちにチームリーダー6人を選ばせた。リーダーが決まったらリーダー会議を開いて力が均等になるようにチーム分けを行った。何度かリーダー会議を開いたり、給食の時間を利用してクラスで話し合いをしたりして試合での細かなルールをいくつか付け加えていった。全員で確認することで、子どもたちが審判を行えるようになった。「全員が均等に試合に出られるようにすること」というルールも出来たため、他の球技ではあまり目立つことのない児童がトライするなど、試合は盛り上がりを見せた。「ボールをもったら、とにかく前に進むこと。」「タグをとられたらアウトではなく、落ち着いて味方にパスを出せばよいこと。」「ボールをもっている味方の斜め後ろをついていくこと。」を教えることで、それなりの試合展開になり、運動量も十分に確保された。
感想・印象 今後の展望	タグラグビーの経験がなかった児童たちだったため、発展的なルール（ノックオン、オーバーステップ、オフサイドなど）は取り入れられなかったが、子どもたちが話し合って自分たちの共通のルールを考えられるというところもタグラグビーのよさだと感じた。また、トライを決めた子どもの笑顔は本当にうれしそうで、特に女の子がトライしたときなどは他の子から「すごい！」と声があがっていた。今後は、どの子も楽しく参加できるタグラグビーのよさを失わずに、どこまで作戦や技術・ルールに重点を置いて指導していくか、そのバランスを考えていきたいと感じた。